The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ベトナム語における呼称法の本質 : 夫婦間の呼称法を中心として
Author(s)	Duong, Van Binh
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59889
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【11】

氏　　名	DUONG VAN BINH（ユオン バン ビン）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学　位　記　番　号	第　２６１３３　号
学位授与年月日	平成 25 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語社会専攻
学　位　論　文　名	**ベトナム語における呼称法の本質　－夫婦間の呼称法を中心として－**
論文審査委員	（主査） 教　授　冨田　健次 （副査） 准教授　清水　政明　　教　授　鈴木　　睦　　准教授　筒井　佐代 教　授　宮本　マラシー

論　文　内　容　の　要　旨

ベトナム語における呼称の本質については、これまでのベトナム語研究や日越両言語の比較対照研究の中では、全くと言って良いほど看過されてきたか、或いは、不十分な分析しか行われてこなかった。特に、ベトナム語の対称法、自称法に関して、体系的な結論を得るほどの研究はこれまで全く行われていない。本論文はベトナム語の対称法及び自称法の中でもその問題が最も色濃く反映する夫婦間の対称法、自称法に着目し、それぞれの使用状況とその意味を記述し、全体

の用法を体系的に明らかにしようとするものである。

第一章では、第一節で、ベトナム語における呼称法の先行研究とその意義に触れた上で、本論の基本的な立場を表明した。その中で、最も本論文に援用できると思われるものはNguyễn Văn Khang（1999）の、「権力的関係」及び「結束的関係」と言う概念であった。第二節では、ベトナム語における夫婦間の呼称法に特化した先行研究を紹介し、特にMai Xuân Huy（1996）、Bùi Thị Minh Yến（1996、2001）、Hữu Đạt（2000）の研究成果に触れながら、本論の立脚点を探った。彼らの研究成果を踏まえつつ、筆者の現地調査の結果や内省を基にして、夫婦間の具体的呼称のペアの摘出を試みた。

第二章では、ベトナム語の呼称法の本質を日本語のそれと比較して論じることを試みた。日本及びベトナムは両国とも長期間にわたって、中国の文化と言語の影響を強く受けてきた。しかし、日本語とベトナム語は元々起源も異なり、言語の類型も異なる。日本語は膠着語型の言語で多音節言語であるが、ベトナム語は孤立語型の言語で単音節言語である。更に、言語的性格も言語習慣も可成り異なる。特にその呼称法は非常に異なる。例えば、ベトナム語においては、どの対話者に対しても、必ず、相手を呼び、自分も呼ばなければならない。相手を呼ばなかったり、自分を称しなかったりすると舌足らずで、礼儀知らずと言われる。時には何らかの意図があるとさえ思われる。つまり、待遇法の重心はベトナム語の場合、呼称詞の選択そのものにあると言える。言い換えれば、相手及び自分を徹底的に呼称し、それによって自分と相手との関係を明示することそのものにあると言える。逆に、日本語においては、交渉の際、誰に対しても、実に徹底して相手を呼ばず、自分を称しない。対話者及び話者をはっきり定めなければならない場合のみ、呼称詞が選択され、用いられる。故意に相手を呼んだり、自分を称したりすると、集団生活の中で意図的な個人の感情の描出と取られてしまう。

これは、日越両言語における呼称詞、呼称法に関わる最も大きな決定的な相違点である。つまり「呼称」の本質と言えよう。この最重要事項が明瞭に理解できなければ両言語の呼称詞及び呼称法の比較対照研究は意味を成さない。しかしながら、日越両言語の比較対照研究の先人達は、この「呼称」の本質を必ずしも明らかにして来なかった。そこで、本章では日越両言語の「呼称」の本質に関わる共通点と相違点を概括的に明らかにし、それを前提として、日越両言語の待遇法の違いにまで論を進めて行った。

第三章では、ベトナム語における呼称の中で最も変化に富んでいるのは夫婦間の呼称であることを論じた。その理由として、まず夫婦の呼称には最初から矛盾が孕まれていることが考えられる。血縁がないのに、婚姻による関係のみで「兄妹」になることが強制されるのである。結婚前の恋愛期から結婚期を経て一生の間、それこそ死ぬまで「虚構」の「兄妹」関係となる。妻は他家の女性でありながら、夫の家庭に入ったその日から夫を兄として敬い、また妻としてつかえ、子供ができたら、「母」の立場になり、更には家族の他の成員に対して「嫁」つまり「娘」として、「妹」として、「姉」として、生活していかなければならない。非常に多くの関係が重なり合っているため、夫婦が互いに愛し合い、理解し合っている時は問題ないが、意見や考え方に摩擦や不和が生じた時、或いは二人が恋愛結婚でなく見合い結婚など別の理由で結婚しなければならない場合などは、時に地獄のような夫婦生活になってしまう場合もある。そうした親疎、愛憎などの感情的な原因も含めた諸事情がベトナム語の呼称法、とりわけ夫婦間のそれに凝縮しているのである。夫婦間の呼称法を理解すれば、ベトナム語の呼称法の全体像が理解できるとも言える。そのため本論文では夫婦間の呼称法に特化して徹底的に調査し、分析していくことにした。

社会の習慣的な呼称法、つまりは社会によって強制される呼称法であるem「妹」→anh「兄」は常に価値観がつきまとう。Em「妹」は必ず目下であり、anh「兄」は必ず目上である。女は常に一段低い位置におかれる。しかも結婚しているにも拘らず実の「妹」と「兄」の関係が強制される。言葉を換えて言えば、em「妹」とanh「兄」が結婚したことになり、結婚によって一種の「虚構」が出来上がる。つまり、夫婦は一生「妹」と「兄」としての劇を演じ続けることが求められる。

夫婦が呼称詞を用いて、互いに感情や気持ちをやり取りする時に、ベトナム語では、二つの段階がある。一つ目の段階は社会的強制とも言えるanh「兄」とem「妹」と言う最も普遍的な呼称詞を用いながら、口調や表情や態度で感情や気持ちを表す段階である。つまり、あくまで社会の強制の範囲で感情を表す段階である。二つ目の段階はその社会的強制を破って、呼称詞そのものを変えることによって、自分の感情や気持ちを表す段階である。夫婦間での呼称法は夫婦それぞれの出自や性格、言語習慣や生活習慣、更には知的レベルや文化程度などにより異なる。呼称法を通じて妻から夫、夫から妻へどの様な感情のやり取りがあるのか、ないのか。その際、どの様な口調や呼称詞が選択されるのか。それを細かく観察してみることにした。更には、Nguyễn Văn Khang（1999）の言う「権力的関係」及び「結束的関係」の概念を援用し、そのペアとなった自称詞と対称詞が「権力的関係」なのか「結束的関係」なのかについても判断を試みた。

第四章では、本論文の結論として、妻から夫へ、夫から妻への呼称法が並行的ではなく極めてアンバランスであることを論じた。妻から夫への呼称法より夫から妻へ呼称法の方が遥かに豊かであり、当然のことながら、「権力的関係」を表す呼称法が極端に多いことが分った。上下関係を表す親族名称を借りて「権力的関係」を表す呼称詞とするだけでなく、元々、上下関係或いは「権力的関係」を表さない固有の人称代名詞、指示代名詞、一般名詞を借りてわざわざ「権力的関係」のニュアンスを出すようにまでなってきている。これらは表面的には「結束的関係」に見えるが、その実は「権力的関係」である場合が多いことにも気が付く。

例えば、夫から妻へは通常、anh「兄」→em「妹」であるが、この「妹」に名前を付けて呼ぶと（付表の2.1.3）、表面的には名前の呼び合いで、「結束的関係」に見えるとしても、ベトナムの社会では直接名前を呼ぶのが許されるのは目上の人からのみであり、そのため「権力的関係」は何らゆるむことはなく逆に「権力的関係」の強化につながってしまう結果となる。

逆に、妻から夫へは勿論em「妹」→anh「兄」であるが、この「兄」に例えば夫の名前を付けて呼ぶと（付表の1.1.3）、逆に「権力的関係」がややゆるむ。何故なら、目上を目下のように呼ぶことで、妻の夫に対するある種の「要求」が見て取れるからである。

また、例えば、妻が自分をmẹ「母」で呼び、夫をbố「父」と呼ぶ場合（付表の1.2.1）などは、名前を付けようとつけまいと完全に「権力的関係」の否定であるが、夫から妻への呼称、bố→mẹの場合（付表の2.2.1）、妻の名前を呼ぶと、どうしても「権力的関係」の気持ちが残ってしまう。このように完全に平等に見える「結束的」呼称でも、前提に「権力的関係」の表示がある限り依然としてアンバランスのままなのである。

また例えば、妻が自分を極端に持ち上げて、bà「祖母」で自称しながら、夫をmày「二人称：親・卑称」で呼ぶ呼称（付表の1.3.1）などは、妻から夫への「権力的関係」の故意的表示そのもので、逆向きの呼称は全く存在し得ない（付表の該当箇所が空欄）。

更には妻がtôi「一人称：中立」で自称しながら、夫をanh「兄」で呼ぶこと（付表の1.6.1）に対しては、一応対称に「権力的関係」を認めていても、自称でその関係を崩したいとの意図がある。逆に夫が自分をtôiで呼ぶ時（付表の2.5）は妻をどの呼称で呼んだとしても、やはり「権力的関係」の表示であり、自称anh「兄」（付表の2.1）より、それがやや曖昧になるだけである。

また、夫がtao「一人称：親・卑称」で自称する時（付表の2.7）は、妻を何と呼ぼうと既に「権力的関係」が表示されており、そのため、逆に妻がこれで自称することは普通は許されない。唯一、tao「一人称：親・卑称」→mày「二人称：親・卑称」の呼称（付表の1.8.1）が許されるだけである。自分をtao「一人称：親・卑称」で自称しながら、夫をmày「二人称：親・卑称」で呼ぶことによって、夫への「平等」を敢えて主張する感情や気持ちを表す唯一の呼称法である。Tao「一人称：親・卑称」→mày「二人称：親・卑称」は、元々家庭外で同等、目下の者に対して用いられる呼称である。それが家庭内に持ち込まれて、夫婦間で社会的に一段地位が高いとする夫から一段地位が低いとする妻に対して改めて用いられるようになる。要するに目上と見なされる夫から目下と見なされる妻に対して用いられることが社会的に認められることになった訳である。これは、「権力的関係」の現われであることが分かる。そのため、逆に地位の低い妻がtao「一人称：親・卑称」を用いると（付表の1.8.1）社会的に批判される。長く家庭内の暴力などを受けていた妻が、我慢の限界を超えた場合などにしか用いることができない。

更には、妻がthiếp「妾：女の自称」で自称（付表の1.9）したり、thiếpにtôi「一人称：中立」を付けて自称（付表の1.10）しながら、夫をchàng「男の若者」で呼んだりして、夫と自分との関係性を否定し、「結束的関係」を表そうとしたりするが、thiếpそのものが元来「女性の卑下した自称」であり、結果的にはem「妹」以上に権力的で封建的な呼称であることに何ら変わりはない。

妻がngười ta「人：一般」で自称する呼称法（付表の1.11）なども妻から夫への「結束的関係」

表明要求の現われであるが、夫は逆にこれで自称しない点（付表の該当箇所が空欄）でアンバランスであり、真の「結束的関係」とは言えない。

Đằng này「こちら」やđây「 此処」のように場所を表す語で自称しながら 、相手を呼ばない呼称法（付表の1.12、1.13、2.8、2.9）は、妻から夫への呼称においても、夫から妻への呼称においても共用され、夫婦が互いに平等に感情や気持ちを表し合うことができるが、一方、夫がđây「此処」で自称しながら、妻をmày「二人称:親・卑称」で呼んだり（付表の2.9.1）、thằng này「この男の若者」で自称しながら、妻を呼ばないような呼称法（付表の2.10.1）は、夫から妻への呼称法にのみ見られる現象であり、この呼称法は、理論上では、「結束的関係」を表しているように見えるが、やはり実際上は、「権力的関係」を表していると見なせる。

更には夫から妻への呼称法のみで用いられる、妻をcô「叔母」（付表の2.5.12）やmày「二人称:親・卑称」（付表の2.9.1、2.11.6）で呼ぶやり方も、理論上は「結束的関係」を表しているように見えるが、実際上では、極端な「権力的関係」の表示であることには変わりない。

「結束的関係」のように見えても、上のように実は依然として「権力的関係」が隠れている場合が多いことが論証されたと思うが、完全に平等な「結束的関係」の表明として最近注目を集めているのが、妻と夫がそれぞれこれまでは呼称詞として認められていなかった「妻」そのものを表す語、「夫」そのものを表す語である、親族名称ではない、言わば「役割」で呼び合うようになっていることである（付表の1.5、2.4）。またベトナムの呼称の原則を逆手に取って、妻も夫も互いに全く呼び合わないことによって相手との関係性を否定し、互いに真の「結束的関係」を表そうとすることもある（付表の1.14.5、2.11.7）。これらのことは以前には全く見られなかった現象である。もし、これが普及すれば、夫婦は封建的呼称の束縛から完全に脱却して、完全な「平等」を手に入れることができるかも知れない。不満の表明のđằng này「こちら」→ø（付表の1.12、2.8）や đây「此処」→ø（付表の1.13.1、2.9.2）のように「場所」を用いた呼称の相互性にもその兆しが感じられるような気がする。日本語の呼称詞の「あなた」や「お前」のように、本来場所を表す名詞が用いられているのも参考になるかもしれない。

本論文ではベトナム語の呼称詞、とりわけ夫婦間の呼称法の詳しい研究を通して、日本語とベトナム語における「呼称」の本質が極めて異なることを論じた。ベトナム語においては、日本語と異なり、徹底的に相手及び自分を呼称し、それによって自分と相手の関係を明示することが求められる。つまり、ベトナム語の呼称は単純に言えば「関係の表示」であり、それによって相手及び第三者との距離を表示するものである。その操作が家庭内においても、家庭外においても基本的には親族名称（呼称）によってなされるのである。時に親族名称（呼称）以外の語も用いられるが、それらは、逆に親族関係になぞらえるのを拒む意図があり、関係を逆に曖昧にする意味がある。原則に逆らって全く呼称をしないのも、同様の効果をねらったものである。この働きはプラスの表象にもマイナスの表象にもなることがあるので、この使用には細心の注意を要する。日越両言語比較対照の研究者にとっても学習者にとっても両言語のこの呼称の本質を深く理解することは極めて重要なことである。

論文審査の結果の要旨

『ベトナム語における呼称法の本質―夫婦間の呼称法を中心として―』と題された本論文は、ベトナム語の文法諸事象の中でも最も難解で最も把握の困難な事象であり、外国人ベトナム語学習者のみならずベトナム語母語話者自身をも悩ます永遠の課題である呼称詞・呼称法の本質にまで迫ろうとする大胆かつ意欲的論文である。

修士論文『日越両言語の比較対照研究―自称詞、対称詞、他称詞を中心に―』（名桜大学大学院国際文化研究科）において、日越両言語の呼称詞・呼称法の類似点と相違点を概括し、ベトナム語の呼称法が文法事象としての待遇法に深く関わることを正しく指摘したにも拘らず、そのことを理論化するにはまだ至っていなかった。本論文では、この視点のもと、今一度原点に立ち戻ってベトナム語の呼称詞・呼称法を徹底的に洗い直し、その中で、自称詞と対称詞がベトナム語では常にペアーとしてセットされることを強く認識し、わけても、夫婦のペアーにそれが正に凝縮していることに気が付き、このペアーにこそ、ベトナム語の呼称法の本質が隠されているのではと考え、論点を一気に夫婦間の呼称に絞って広範かつ綿密に調査・研究することを試みている。

そもそも、ベトナムの呼称法がこのように複雑になった、その原因の一つは、恐らく、双系的社会から、父系的社会へと代わる過程で、中国中原の漢民族の直接的・間接的支配を受け、その思想を受容し、それまでの村落中心主義から家族中心主義、一族中心主義へと向かい、その強化のため細密かつ複雑な親族体系が主として漢語の用語を借用して確立され、その綿密にコード化された一族表の中に各個人が明確に位置付けられたことにある。まるで一族内部での役割分担の確立と言っても良いかも知れない。個々人は一族のどの位置にあるのかを強く意識しながら日常を生きることが求められるようになったのである。その「位置取り」に応じて、相対する人との関係を瞬時に判断し、その関係を反映する適切な自・他呼称のペアーをまた瞬時に選択し、まるで「合言葉」でもあるかの様に「名乗り合う」ことから会話を始めなければならなくなった。この「名乗り合い」で、相手との関係が確認され、漸く、安心して対話がなされるのである。つまり、対話の前提が自・他の関係の確認と言える。これは親子でも兄弟でも同様であって、会話の一文一文でこれがなされなければならない。それを省略すると何らかの意図の表示と受け取られてしまい、特に上下関係に基く会話で下の者がこれをすると「無礼」と見做され批判の

対象となってしまう。しかもそれが家族・一族の中だけに留まらず、社会にも拡大され、社会全体が一族に擬され、個々人は同様の「位置取り」が厳しく求められるようになったため問題は一層錯綜してしまった。こうして自己は実際の一族と「仮構」の一族の両世界の中での二重の「位置取り」が求められ、しかもそこで用いられる用語は全く同一の親族名詞であり、これがベトナム語の呼称法を更に混乱に陥れる主要因となっている。そして一層の困難をもたらすのが正に「仮構」そのものの夫婦の呼称法である。他家から来た嫁は「仮構」の一族から実際の一族へ言わば「横すべり」した存在であり、実際の一族の中でやはり「位置取り」がなされなければならない。そこでベトナム人が思いついたのが、夫婦を「兄妹」にしてしまうと言う極めて乱暴な方法だった。つまり、実際の一族とは全く関係ない社会の一員であった人が嫁として一族の成員となった途端、夫の実の妹として登録されるのである。しかもベトナム社会では夫婦は依然として別姓のままであるから他家の姓のままで夫の実の妹になるのであり、そこから様々な苦悩と矛盾が生じるであろうことは誰が見ても明らかである。本論文は、この正に「権力的関係」とも言える呼称の固定化によって生ずる矛盾が、如何に呼称の変遷に反映するのかを綿密な調査と深い内省に基いて解明しようとした画期的論文と言える。妻から夫への自称・対称のペアー、逆に夫から妻への自称・対称のペアーの実態と変遷を、アンケートやインタビューの手法を用いて広範かつ徹底的に調査・収集し、その一つ一つのペアーの生まれる、二人の心理的要因、環境的背景などを実に丁寧に辿って理論化しようと努めている。平等を標榜する社会主義社会に残る封建主義的遺制とも言える現象に手をつけるには相当の勇気と意識の改革が求められるが、筆者はこの難問に真摯に取り組んだと高く評価できる。

但し、その理論化の過程で用いられた「権力的関係」と「結束的関係」の用語については定義付けが曖昧で、両関係にもプラスの意味とマイナスの意味があり、また両関係で割り切れない関係も存在し、説明の理解に今一つ無理が見られた。また本論文が社会言語学的に意味を持つには背景となるジェンダーに関わる文化についての考察が必要であり、その点についての言及が少なく、問題として指摘された。現社会主義政権が如何なる社会を目指そうとしているのか、その根幹に関わる問題であり、本人も含めた真摯な取り組みが期待される。

これらのことを総合的に判断し、本審査委員会は、本論文が博士（言語文化学）の学位を与えるにふさわしい論文であると判断した。